

研究ノート

資本論における方法と世界観（中、その二）

——その残された諸問題の一つについて——

梯 明 秀

内 容

まえがき

（後号）

九 マルクス主義の発展

一 方法ということ

七 会見以前のマルクスとエンゲルス

二 世界観ということ

三 近代経験科学の体系化

四 近代科学としての経済学における体系化

五 賃労働者の実存形態——（以上、本巻第一号）

六 マルクス主義の成立——（本巻第四号）

七 会見以前のマルクスとエンゲルス（本号）

八 徹底したヒューマニズムの精神——（以下、次巻の

いままでのところで、ぼくは、マルクス主義の成立ということについて、お話しをしまいたわけなんで、そこで、その続きとしては、当然ながら、この成立したマルクス主義が、パリ時代からブリュッセル時代にかけて、どのように発展していることになるか、ということに、話しを移していくのが、順序を踏んだことになる、と諸君も思われるだ

ろうと存じます。ぼくとしても、そのようなつもりであったのですが、ただマルクスおよびエンゲルスの系譜をたどって、マルクス主義の成立について、ぼくが話しを進めるだけのものにすぎなかったにしても、そして、それに続いて、その発展の一步一步を、同じく系譜にそうて、お話しを続けることにしようとするにあたって、この発展過程の一步一步の二人の諸著作の思想内容を理解しようとするばあいには、どうしても、それ以前に、マルクス主義の成立するまでの二人の学問的な歩みの一步一步を、たどっておかないと困る、という問題に、ぼくとしては気づかないわけにはゆかないのであります。と申しますのは、四四年の「経・哲手稿」なり「国民経済学批判大綱」なりによって区切られる、そのマルクス主義の成立についての、その思想内容だけではなく、その後の発展過程が一つ一つの著作をも、いや、この発展過程の終点としての『資本論』においても、その奥底に一貫して流れている重要な思想がある、というように、ぼくとしては思わないわけにゆかないからなのであります。マルクス主義者としての立場に立ったのちの二人の一步一步の著作の理論内容は、そのテーマが次から次へと発展して変っていったということ

資本論における方法と世界観(中、その二)(梯)

が事実であるにしても、これら二人のすべての著作の根底に、不変のままに連続しているところの無視できない一つの思想が、あるということは、とくに注意しなければならぬと思いたいわけでありませう。いいかえれば、マルクスだけでなく、エンゲルスにおいても、かれらの生涯を貫いた不変の思想として、徹底したヒューマニズムがあったということに、諸君の注意を、ここで呼び起しておきたい、というように、ぼくは思うわけなのであります。そういういみで、これらの二人がマルクス主義者になることが出来たというように、さきに申しました四四年に、いたるまでの、それ以前のことを、これらの二人の生いたちのことから、やはり、年譜にそうて、お話しをしておいて、その後で、マルクス主義の発展のことに、ぼくの話しを移してゆくことにしたいと存じます。

さて、まずマルクスについてなんでありますが、このカー・マルクスは、一九一八年の五月五日に、ドイツのライン川のトリールという小さい町で生れております。このトリールという町は、現在の地図で見ると、ルクセンブルグとの国境に近いモーゼル河畔にあつて、古くからあつた地方の一つの城下町、すなわち古都であつたといわれています。彼の父

も母もともにユダヤ人であって、この親父さんの方は、弁護士を職業としていて、そして、自由主義者であったとされており、ユダヤ人にたいする迫害を避けるために、このマルクスの両親は、キリスト教に改宗しております。このような家庭に生まれたマルクスの幼少の頃は、或る程度の富裕な生活に恵まれていて、その家族は、教養も高かったとされており、やがてマルクスが三〇年の十月に進学していたトリールの高等学校（IIギムナジウム）を卒業して、大学へ行く頃になって、すなわち一八三五年の十月に、この父親の希望にしたがって、ボンの大学で法学を勉強することになっております。しかし、当時のドイツの思想界を哲学的に支配していたヘーゲルの名声に強く惹きつけられたということも、多少、あつてのことだろうと思われれますが、翌三六年の十月には、このボンの大学を去って、ベルリン大学の、やはり法学部に再入学することになっております。

これにたいして、フリードリッヒ・エンゲルスの方は、一九二〇年十月二十八日にライン東岸の繊維工業地帯の中心地であるバルメン市の紡績工場主の息子として生れております。その家庭は、マルクスの家庭とはほぼ同じように裕福であつて、

しかも信仰の厚いクリスチャンであつた、とされており。そして、エンゲルスは、バルメンの市立中学（？）を卒業して、高等学校に進学するために、三二年の十月に、エルバーフェルトに移住しているのですが、その最終学校を終了まえに、親父さんの強要によつて、この高等学校を三七年の九月に、中途退学することをよぎなくされており。そして、親父さんの関係している商会で、その営業を助けるように、させられております。それにしても、これまた、マルクスのばあいと同じように、おそらく親父の気持を尊重して、その希望に添つたのでなからうかと思えるのであります。そういうわけで、さらに翌三八年の十月には、ブレーメンの或る大きな商業会社に勤めて、そこで将来は一人前の商売人になれるように訓練を受けることになっているのであります。そして、ゆくゆくは、父親の家業を継ぐつもりにもなつて、国内商業や貿易の仕事を、はやくから見習いさせられていたというわけであります。そして、四一年には、いったんブレーメンに帰り、まもなく、ベルリンの砲兵隊に一年志願をして、その兵役の義務を果す、ということになっております。

このような伝記的な事実から推測しますと、青年時代の初

期では、マルクスもエンゲルスも、ともに、親の意見に逆らわない柔順な孝行者であったようであります。しかし、時局にひそむ社会的な色々の矛盾にたいして、純粹であるがゆえに敏感とならざるをえないところの青年としては、だれしも、これらの色々の矛盾を直接的に反映せしめて、時局を前むきに進展せしめようという気持になるはずであります。

すなわちエンゲルスは、ブレーメンの商社での勤務中に、余暇を作つて、文学に親しんでおり、そして、はやくも青年ドイツ派の文筆活動に大きな関心を寄せだしていたのであつて、三九年には、かれの最初の作品となつてゐる「ウツパタールだより」を執筆して、そして、この青年ドイツ派の文芸雑誌『テレグラフ・フュール・ドイツチュラント』に掲載される、ということになつておるわけであります。以後、この雑誌の編集部は、エンゲルスの書く書評や文芸評論を、その雑誌に載せることを承認して、その都度、それらを掲載したということになっております。それだけではなくて、その頃のエンゲルスは、同時に、ヘーゲル左派に属する哲学者たちの、宗教批判の思想に影響を受けつつあつたのであつて、とくに、タビット・シュトラウスの『イエス伝』を感激して読

んだ、とされており、しかも、このことから遡つて、ヘーゲル哲学そのものをも読み始めていたのであります。これは、四一年の三月にバルメンに帰るまでの、かれのブレーメン時代のことなのであります。他方で、マルクスは、どうであつたかと申しますと、三六年のベルリン大学への入学後には、その専問として決めていた法学の講義のほかに、歴史や文学史の講義にも、さらにそれに加えて、いうまでもなく哲学の講義にまで、聴講の範囲を拡めており、そのかたわら、英語やイタリア語などの語学の勉強を怠らず、さらに、古代作家のドイツ語訳さえ、やつていたのであります。このマルクスの哲学への関心は、当時にベルリン大学の講師をしていたブルーノ・バウエルに刺戟されて、そのバウエルの講義をつうじて、間接にヘーゲル哲学を学びとる、ということになつております。ヘーゲルは三一年に死んでいますが、このバウエルは、最初はヘーゲル右派に属しておりましたが、やがて、左派の方に転向していつて、ついには、ストラウスに続くヘーゲル左派の中心人物になつて、福音書の批判的研究を進めていたのであります。マルクスは、このバウエルに師事して、いうまでもなく、そのヘーゲル哲学にたいする批判の

方向を教えられた、というわけですが、それだけでなくて、翌三九年には、ヘーゲルの「自己意識」の弁証法の研究から、ずっと遡って、ギリシヤ哲学を研究することになり、主として古代ギリシヤの唯物論哲学に重点を置いて、そして、一つの論文「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異」を執筆するまでに、その研究を深めていくのであります。そして、この論文を、ベルリン大学卒業の年の四月の四月に、イエナ大学の哲学科の部長であったバッハマン教授に送って博士号の請求をして、そして、この学位記を、同月中に授与された、ということになっております。

このマルクス学位論文の執筆の年である一八三九年は、かれの二十一才のときであり、そして、エンゲルスが十九才にして、はやくも「ウツパータールだより」を執筆して、ただいま申しました文芸雑誌に、それを発表したことになっている、ちようど、その同じ年にあっているわけであります。このエンゲルスは、マルクスとは、その生いたちと経歴とを異にしております。すなわち、四一年の三月末にブレイメンからバルメンに帰り、一年志願兵として砲兵隊で、自分の兵役義務を果すために、その年の九月にベルリンへ赴く、という

ことになっております。すでに、ブレイメン滞在中に、シュトラウスの『イエス伝』を読んでいたときから、ヘーゲル左派のブルジョワ民主主義を、さらに労働者の立場から学びとろうとしていたわけであったので、その兵役の期間中に、ベルリン大学の聴講生となって、そして、ブルーノ・パウエル、カール・フリードリッヒ・ケッペン、その他の青年ヘーゲル派の進歩的インテリゲンチアのグループに接触し、その「ベルリン自由人」のグループの青年たちと、親密な交わりを持つことになりました。それだけでなく、エンゲルスは、四一年になって、ルードヴィッヒ・フォイエルバッハの『キリスト教の本質』を研究しはじめると同時に、シェリングの哲学の反動的傾向を指摘したところの一連の論文——すなわち「シェリングのヘーゲル論」や「シェリングと啓示」および「キリストにおける哲学者、シェリング」など——を執筆して発表している、というところまで、哲学の研究を進めていたし、そのほかに、歴史や文学にも関心を持ち続けていたのであります。そういうようなわけで、マルクスとエンゲルスとは、そのベルリン時代においても、まだ未知の間柄にあったとしても、ともに、ヘーゲル左派の哲学からの思想的影響下にあ

つて、漸次、急進的な政治思想の持ち主になっていったのであります。

三〇年代になっても、ドイツの政治状況は三十以上の封建的な領主が対立しあつて、それぞれの領土を支配しており、しかも全体としては、まだ、メッテルニヒの反動体制に制約されているという後進性のなかで、エルベ河以南の地域は、とくに、ライン州は、フランスの大革命とイギリスの産業革命との刺戟のもとに、商工業の近代化が始まりつつあり、一五年までフランスに占領されていたライン西岸の鉞工業の発展ともなつて、その資本制的な生産様式が、ドイツで最大の領土を持つていたプロイセン王国の権力機構を、絶対主義的な体制として、より強固なものにしてゆくための一方の支柱となつていたのであります。しかも、ナポレオンによつて征服されたことの副次的影響として、ライン河畔の新興ブルジョワジーは、フランス革命のスローガンどりの思想的洗礼を受けたこともあつて、進歩的な自由主義の立場にたつていたわけでありませう。おおざっぱに言つて、このような状況のなかにあつて、すなわち、経済の資本制的方向への進展と矛盾する政治の封建制的保守性、この相反する方向を代弁す

資本論における方法と世界観（中、その二）（梯）

る色々の思想傾向は両極端に背馳してゆかざるをえない、という状況のなかにあつて、ドイツの当時の思想界を哲学的に支配していたヘーゲルが、三一年に死んでゆく。その後、ヘーゲルの弟子たちは、ヘーゲル哲学の神学面を保守的に継承しようとする老ヘーゲリアナーと、この神学面を近代の合理主義の方向に解釈してなおそうとする青年ヘーゲリアナーとに、すなわち、ヘーゲル右派とヘーゲル左派とに分裂することになつたのであります。そして、まず最初に『イエス伝』を著わしたストラウスは、教会および大学から追放されながらも、ドイツの保守的な各界の各層にたいしては、驚天動地といつてもよいほどの思想的影響を与えたのであります。それが、それに続くバウエルの福音書の批判的研究から、フォイエルバッハの四一年の『キリスト教の本質』の出版にいたるまでの、これらの一連の宗教批判という思想の発展は、プロイセン絶対主義にたいする新興ブルジョワジーの闘争、すなわち、ドイツにおけるブルジョワ革命を進展せしめるための理論的な一翼であつたのであります。そして、このような時局の推移のなかにあつて、マルクスとエンゲルスとは、それぞれ違った経歴を歩みながらも、二十才前後の時期におい

ては、お互に未知の間柄でありながらも、このようなヘーゲル左派からフォイエルバッハの唯物論にいたる革新的な思想の動きに、同じように強く影響を受けたというわけでありませう。しかも、マルクスのばあいは、大学時代に、エンゲルスのばあいは、兵役期間中に、これらのヘーゲル左派の先輩たちの若干の人たちと交遊していたし、「ベルリン自由人」の集まりにも、同じく顔を出しております。にもかかわらず、これらの二人がこの時期に交遊していなかったという事実は、ぼくたちとしては、ちょっと不思議に思わないわけにはゆかないと存じます。

マルクスは、二十三才になったその四年に『デモクリトスとエピクロスとの自然哲学の差異』という学位論文を提出したのでありますが、そして学位を得てボンに再び移り住んだのでありますが、これは、ボン大学の教授のポストに着くことを考えてのことであつたのであります。あるいは、おそらくは、当時のプロイセン絶対主義の反動的な文教政策の統制下にあるにしても、ボンの大学でなくても何処かの大学で、この業績をもって、職を得たうえで、アカデミックな研究生活を続けたいという念願を持ちつつづけていたのですが、この

宿願は断念せざるをえない政治状況に追いつめられないわけにはゆかなかつたのであります。すなわち、あたかも、その頃に、自分の師事したバウエルが、その神学批判のために教壇を追われるということが起っていたし、また、それだけでなく、その他の進歩的な学者が大学から追放されるということが続いて、仕方なしに、ライン地方の産業資本家たちが、封建的な勢力に対抗するために、ケルンで発行していた自由主義的な「ライン新聞」に入社する、ということになります。この学位論文の内容自体についても、その執筆中（四一年の四月）の或る日にバウエルから、そんなことを書いてると大卒への就職は駄目になるぞ、と忠告されたことも、あつたわけでありませう。

とにかく、このように、アカデミーにおける研究生生活を断念して、ジャーナリズムの世界に飛びこんだ、というこのところこそは、マルクスの将来の運命を決めることになつたのであります。たんなる自由主義的な編集方針にとどまっていたところの、この「ライン新聞」も、きびしい検閲制度で言論を抑圧しようとする反動的な国家権力に直面していたときに、すなわち四二年の四月に、マルクスは、この新聞に協力する

ことになり、そして、十月の中頃には、その主筆となって論説を書かねばならないことになったわけなのであります。そのかぎり、当時のドイツの経済的な時事問題、たとえば、

後進国の資本家にとって死活問題であるところの貿易政策や、ドイツにおける資本主義の成長が必然的に生み出していく農村の窮乏化など、その他の経済的な諸問題を、次から次へと取りあげてゆくのは、いままでの哲学的な教養だけでは、どうにもならないことを、マルクスは、身をもって痛感して当惑するほかなかった、というように、ぼくたちは十分に推定できるわけであります。ついでに申し上げますが、マルクスは、この新聞に入社する直前には、なお一つの哲学的な論文を、すなわち「シュトラウスとフォイエルバッハとの審判者としてのルッター」を執筆していたのであります。この論文は、翌四三年に「アネクドータ」の第二巻に発表されており、こうした哲学的な意識の枠にあつたにもかかわらず、この新聞の編集方針が反政府的な方向を採用してゆかないわけにゆかなかつたかぎり、マルクスとしても、大学時代から培ってきた体制批判的な——「現存するものへの仮借なき批判」の——精神からして、この「ライン新聞」

に協力するようになったということは、また当然のこととも言えるのであります。

このようにして、マルクスは、この「ライン新聞」への協力から、いよいよ入社して、さらにその主筆となる、ということと契機として、かれ自身の理論的意識の視野を哲学の領域から現実の世界にまで拡大する、ということになります。

すなわち、入社以前に、すでに、この新聞のために、四一年夏の州議会の議事を論評することを約束して一論文「出版の自由と州議会議事の公表についての討論」を寄稿し、そして、入社後に、まもなく、「木材窃盗取締法に関する討論」を執筆しております。このようにライン州議会における討論をテーマにした論文を、つきつきと執筆することになっております。そのなかには、検閲に引っかかつて掲載できなかったものもあります。そのようにして、マルクス自身も、かれの指導下の「ライン新聞」も、その編集方針を、急進ブルジョワ民主主義から革命的な民主主義の方向に、もってゆくことになったのであります。そして、当時のドイツにおける進歩的地域であったライン州のその州議会が、依然として、貴族的な土地所有者たちの召使の役割しか演じていないことを、マ

ルクスは、暴露してゆくのであります。とりわけ、マルクスが始めて経済問題を取りあつたところの「木材窃盜取締法についての討論」をテーマにした論文、および「モーゼル通信員の弁護」という論文は、政治的にも社会的にも差別待遇されている貧しいモーゼルの農民層および勤労大衆の、その苦しい物質的生活の状態を分析しているわけでありますが、このことは、政治的背景には経済的諸關係が横わっているということ、マルクスが、はじめて自覚するにいたったことを、ものがたっているのであります。いいかえますと、いまだ急進的な民主主義者であるにすぎなかつた当時のマルクスが、社会主義に関心を持たないわけにはゆかない、という心境の変化を、そこに見ることができるのであります。このようにして、木材の自由伐採を禁止した法律を、マルクスが批判したことによって、州政府は、この「ライン新聞」および

その株主たちをたいして、圧力を加えるという状態になる、ということが、同時に起ってきたのであります。そのために、マルクスは、この新聞社を、自らの意志で辞めることに決心して、決心どおりに辞職したのであります。政府当局の圧力は、マルクス辞職後になっても続いて、そして、他の競争

紙からも、社会主義の編集方針を、とっているかのように中傷されることになり、ついには、この「ライン新聞」を廃刊に追いこんでしまったのであります。

このようにして、それまでは急進自由主義者にすぎなかつたマルクスも、いよいよ、社会主義とは何か、ということをも根本的に研究しなければならない破目に追いこまれていく、ということになるのであります。年譜によりますと、四二年の十月から翌年の始めまでに、マルクスは、フランスの空想的社会主義者たち、すなわち、フーリエ、カベール、テオドル・デザミ、ピエール・ルルー、ヴィクトル・コンシデラン、それからブルードンの著書を読んだ、ということになっております。そして、これらの空想的社会主義の示唆してくれる立場から、目前の後進国ドイツの複雑な社会状態についての現状を分析するということは、マルクスにとって、さしせまつた仕事となってきたのであるにしても、そのような仕事のために、どうしてもヨーロッパの近代に成立した市民社会の経済的構造が何であるか、というところまで掘り下げたテーマについての研究を、これから新たにやらなければならぬと感得することになります。そして、このように視野を拡

げた新たな研究に改めて取りくむことに、マルクスは、いよいよ決意を固めるということになったわけでありますが、そのためには、また、どうしても、それまでやってきた編集の雑務から離れて、自由な研究時間を確保する必要があります。そこで、マルクスとしては、自分の生涯において貴重な体験を与えて呉れた「ライン新聞」を思い切って辞職するほかはなかったであります。それだけでなく、いったん決意したとおりの研究を自分自身に保証してくれそうな自由な政治的環境を求めて、四三年十月にパリに移住することになったというわけであります。ところで、パリ亡命後に、いま申しましたようなテーマの研究に、早速、着手するのですが、そのばあいには、マルクスの頭に浮んでいた文献は、やはり、ヘーゲルの『法の哲学』であつたわけです。それにしても、このヘーゲルの社会哲学を『ライン新聞』編集期における体験から批判的に読み直すということを、マルクスに駆り立てたものは、いま申しましたように当時のドイツの急角度に変化しようとしていた社会的環境であつた、ということをも、ぼくたちは忘れてはならないと存じます。

さて次に、エンゲルスの四〇年の始め頃について、お話し

資本論における方法と世界観（中、その二）（梯）

することにいたしますが、当時の青年エンゲルスの魂をゆすぶっていたものも、青年マルクスの魂にたいするのと同様に、そのように激動しつつあつたドイツ国民の社会情勢と、それを集中的に反映したヘーゲル左派の思想的動向であつたのであります。さきに申しましたように、エンゲルスは、その出身がライン州であることは、マルクスと同じであります。マルクスの生れ故郷が、静かな古都アトリーで、知識人の息子として正規の大学教育を受けている、というのと違って、エンゲルスは、ライン繊維工業の中心地としてのバルメン工場主を、親父さんとして生れ、大学への進学を諦めさせられて、この親父の工場の実務を、手伝わせられていたのであります。しかし、このことが、逆に、当時までにドイツで漸やく成立しはじめていたところの産業資本というものの、その実体を、エンゲルスに早やくから、覚えこますことになり、そして、一般に資本主義なるものが何であるか、という認識については、その現実面からアプローチしてゆくという長所も兼ねそなえて、この青年エンゲルスは、青年マルクスよりは、二歩も三歩も、先の方を歩いていた、ということになるわけであります。そういうわけで、はやくも一八三九年には、

二三七（五九三）

エンゲルスの最初の論文が「ウッパタータルだより」という標題で、青年ドイツ派の文芸雑誌に公表されるまでに、なっていたわけでありませう。すでに急進自由主義の立場までに自分の思想を成長せしめていたエンゲルスは、この経済学的なルポルターージュにおいて、自分の故郷の工場労働者の悲惨な生活状態を描きだし、その現状についての世間の人々の無理解にたいして、とにかく、ドイツのブルジョワや僧侶たちの偽善と蒙昧さにたいして、怒りをこめた皮肉をあびせているのであります。それから四一年から二年にわたって、エンゲルスはベルリンで軍務につくのであります。この兵営での服役中に、青年ヘーゲル派を主流とした「ベルリン自由人」のグループの仲間入りをして、とくに、フィヒテの思想的系譜にあつたモーゼス・ヘスから、社会主義の理論について深い影響を受けることとなります。このヘスの主張する社会主義についての理論が、どういふ思想内容のものかと申しますと——これは、さきほど申しおきましたように、杉原さんの著書からの受け売りの知識にすぎないのですが——それは、要するに、近代社会に発生した階級的な対立関係は、十八世紀におけるドイツの哲学革命やフランスの政治革命では、十

分に止揚できないままできているが、今世紀のイギリスを中心として起るはずの社会革命によつて、はじめて徹底的に解決される、という主張なのであります。このような社会主義の思想内容に、エンゲルスは、つよく影響されて、四二年の夏ごろには、自分の思想的立場を、急進自由主義から社会主義に転換させないわけにはゆかない、ということになったのであります。そして、この年の十月には、論文「プロイセン国王フリードリッヒ・ヴィルヘルム四世」を執筆して、プロイセンの反動的な国家体制が、すなわち、このヴィルヘルム四世が打ちたてようとする「キリスト教的ドイツ国」なるものが、中世の封建主義に逆行せしめようとする絶対主義の権力機構でしかないことを、エンゲルスは、鋭く分析的に批判するまでにいたつたわけでありませう。

このような思想的立場の転換を、兵営内で成しとげて、その年の秋に兵役を済ませたエンゲルスは、間もなく、親父さんの事業の關係で、その事業を継いでゆく運命にもあつたわけで、マンチェスターの紡績会社に勤めることになって、その年の十一月にイギリスに渡ることになり、一人前の実業家としての修業をするために、四四年の八月まで、滞在したと

いうことになっております。このような経歴の表面だけを見ると、この若きエンゲルスは、ただ、親父さんの期待どおりに動いている孝行息子にすぎなかったようですが、あるいは事実として、孝行息子であったのかも知れませんが、この孝行息子の心のなかでの思想的な変化から見るとすると、このような運命にあった自分の生涯の出発点を、逆に活用していった要領の好い若者だったのでないか、とも推察しないわけにはゆかないのであります。と申しますのは、この若きエンゲルスは、このイギリス滞在の二年間に近い期間に、自分の社会主義の思想的立場を、イギリスの先進的な経済的な事実によって確めて行つて、そして、マルクスとは無関係に、独自の研究によって、唯物史観の立場に到達するまでに、思想的な成長を遂げているからなのであります。

そこで、このイギリス滞在中のエンゲルスの、この思想的成長を簡単に述べてゆくことにいたしますと、四二年にイギリスに渡つてロンドンに着くと、間もなくして、はやくも、「国内危機についてのイギリス人の見方」、「国内危機」、「政党の立場」、「穀物法」、「イギリスにおける労働者階級の状態」という論文を、次から次へと執筆して、これを「ライン新聞」

資本論における方法と世界観（中、その二）（梯）

に投稿して、そして、これらのうちの三つの論文は、この新聞の十二月にそれぞれ掲載される、ということになっております。これらの論文のなかで、エンゲルスは、イギリスの政治、経済の諸情勢を概観してゆくのでありますが、その結論としては、「近く到来するだろう商業恐慌と、その結果としてのプロレタリアートの全面的失業とを原因として、イギリスに、革命が必然的に起るようになるだろう」という見とおしに、立つことになりました。そして、「この革命は、イギリスに起るすべてのばあいと同じに、まず利害関係が、その口火を切り、そこから政治的な党派のいろいろのイズムが、後から発生する。したがつて、イギリスに起るべき革命は、政治革命でなくて、まず社会革命であるべきであろう」というように、結論しているのであります。これも、また、受け売りの知識として申しあげているのですが、このようなエンゲルスの到達した結論的思想は、ドイツ国内に居た当時にへスの社会主義の影響下にあつて、そして、イギリスの現地に臨んだかぎり、イギリスの経済および政治については、今後の動向を予見している、といった試論であることは、ぼくたちの十分に推察できるところであります。しかし、エンゲルス

二三九（五九五）

のイギリス滞在中での思想的成長は、このような予見から出  
発して、そのいうところの利害関係なるものの実態を、身を  
もって体験し、そして、さらに調査活動をやるというプロセ  
スのなかで、成就してゆくわけであります。とにかく、一人  
前の実業家になるためには、その実務の見習いは、エンゲル  
スとしても、やっておったわけですが、そのことは同時に、

イギリスの社会状況についての見聞を、しかも社会主義の立  
場から括弧することになった、ということは当然ながら考えら  
れることであります。すなわち、世界中で最も進んだ紡績工  
業を中心としたイギリスの発展した資本主義の現状を、身近  
に見聞したわけですが、この先進国の最高度に発展した資本  
制的生産に従事している労働者たちの、政治的にも経済的に  
も極めて不遇な状態におかれている、という矛盾した実体に  
触れて、エンゲルスは、とくに労働問題に関心を唆られると  
いうわけであります。そのかぎりでは、亡命ドイツ人労働者や  
チャーティストたちに接触し、このチャーティスト運動の発  
生の必然性について、理解を深めることになるのであります。  
四三年にエンゲルスの執筆した論文を、ここで試みに列挙し  
て見ますと、『シュヴァイツェリッシュャー・レブリカーナー』

誌の五月号および六月号に、「ロンドンだより」をチャーテ  
ィスト派の機関誌『ザ・ニュー・モラル・ワールド』誌の十  
一月号から翌年の一月号にかけて、「大陸における社会改革  
の進展」という長文のものと、短い文章の「大陸の運動」を、  
発表しているのであります。

このようにしてエンゲルスは、イギリスに来るまえから抱  
いていたところの社会主義の思想に、いよいよ自信を強めて、  
その理論的深化を自分の将来をかけたテーマにしなければな  
らない、ということになったわけであります。そして四二年  
の末から翌年の八月頃までに、サン・シモン、フリーエ、オ  
ーエン、フランソワ・ノエル、パプーフ、カベール、ヴィルヘ  
ルム・ワイトリンクなどの空想的社会主義者や共産主義の著  
作を耽読した、ということになっております。それと同時に、  
チャーティスト運動に共鳴して、マンチェスターの労働者街  
を訪ねたり、大衆の集会や労働者の会合にも、顔を出すと  
いうようになっているのであります。そのような研究と行動と  
によって、エンゲルスは、近代以来の市民生活のなかでの、  
この資本家と労働者とのあいだの生活上のすべての不平等、  
この不平等を除去しようとするところのイギリスのこのチャ

ーティスト運動によって進められてきた全国的な労働者の組織化、そこから発生したイギリス労働者の階級的自覚、といったことを、エンゲルスは、実地に学びとる、というわけがあります。これらの経済的事実は、資本主義の発展において後進国であった祖国ドイツにおいては、当然のことですが、すべての思想家には殆ど全く気付かれずに無視されてきたところのものであったわけであります。それにたいして、これらの経済的事実に身近かに触れて感得するところがあつたエンゲルスは、この経済的事実こそが、人類の歴史的發展において決定的役割を演じていること、そして、経済的事実を基盤として階級的な対立関係が発生していること、とくに、大工業の発達したイギリスにおいては、十分に発達した階級対立が、政党の形成や党派間の闘争などとして現象している政治の歴史的發展の原因になっていること、したがって、一般的にいって、近代以来の資本制の社会の進歩なるものは、資本家と労働者との階級的対立を内在化せしめていたし、この階級的な対立関係こそが資本主義を發展せしめる原因になつていているということ、要するに、後になってマルクスとともに理論的に完成することになるところの、史的唯物論の立場

資本論における方法と世界観（中、その二）（槌）

に、自然と立つことになつたわけであります。そして、エンゲルスは、事実として、イギリス滞在中に、この独自に構想された萌芽的な唯物史観の見地から、資本主義社会なるものの経済的構造を研究しようとして、近代以来にイギリスにおいて成立し發展してきていた経済学なるものを、その色々な学派の立場は立場として、学説史的に系統だつて勉強することに努力していたのであります。年譜によりますと、まゝに挙げた社会主義の勉強と同期間中に、スミス、リカルド、セー、マカロック、ジェームス・ミル、その他の経済学者の著述を讀破していた、ということになっております。そして、この勉強の成果が、四三年末から四四年の一月までに執筆したところの「国民経済学批判大綱」という論文に、結実するわけであります。

この論文でエンゲルスは、重商主義以来の経済学の代表的諸理論を、近代資本主義の成立發展に対応せしめて、歴史的に辿りながら、それらの理論体系のどれを見ても、すべて、資本主義そのものを成り立たたしめている私有財産制度についての分析的追求が不十分であること、その結果として、各時代の経済社会の現象的な表面だけの実証主義的研究にとどま

ていること、そのかぎりにおいて、資本主義そのものの根底に内在している本質的な矛盾としての階級関係を、認識することができていないこと、要するに、資本制的私有財産制度なるものを動かしえない前提として、これを原因とした諸結果を客観主義的に承認するという法則観の枠内にとどまっているだけであって、私有財産制度を批判的に捕えなおすという認識論的態度が、まったく欠如しているということ、これらのことを、エンゲルスは指摘しているであります。それだけでなく、さらに、資本主義の発展は客観的にも恐慌を招来せざるを得ず、他方で、それと並行して大衆の窮乏化を拡大してゆかざるを得ず、その結果として、賃労働者階級による社会革命が必然的に発生すべきである、ということの理論的根拠を、エンゲルスは説明しようとしていたのであります。

このようなエンゲルスの研究は、経済学説史をつうじて、資本主義固有の階級的矛盾が必然的に発展することを分析した研究は、経済的必然性によって社会革命の到来を論証しているものとして、あきらかにエンゲルスをして、科学的社会主義の立場に到達せしめていることを、いみしております。そして、経済社会の発展が弁証法的な論理によって導かれてい

るということも、この論文の叙述に見られるように、エンゲルスは自覚しております。

ただ残念なことは、四四年のこの論文で、エンゲルスとしては、資本制的な私有財産制度を賃労働者の立場から批判的に捕えなおす、ということになる必然性を説いてはいるのですが、しかし、この批判的に捕えなおすということが、どのようにして賃労働者にできるのであろうか、という認識論そのものについて、弁証法的に説明するということが、見いだされないことなっております。この点を意識的に問題にしたのが、マルクスの四四年の『経済学・哲学手稿』なのであります。ところで、このマルクスの同じく私有財産制度を批判した『手稿』に比べますと、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』の叙述における弁証法は、歴史の客体的過程の論理として展開されているだけであって、この客体的な弁証法が発展するために不可欠な、その実体的モメントを、論理的に説明してみようという努力の跡が見られない、ということが、ぼくたちに良く解ります。要するに、ヘーゲルの弁証法を、エンゲルスは、ただ一面的に対象的客体の発展の論理として理解するのにとどまっていた、言いかえますと、客観主

義的に理解するのにとどまっていた、ということになります。それにしても、このような対象的過程の論理として、ヘーゲルの弁証法を批判的に継承していたかぎりでは、エンゲルスは、資本主義社会の経済的発展が、恐慌と大衆の窮乏化という形で現われる自己矛盾を内在していて、そして、この自己矛盾の爆発としての賃労働者による社会革命は、法則的必然性として、そのうちに起らねばならぬ、というようなことが、主張できたわけにあります。そのように限定された意味では、この「国民経済学批判大綱」なる論文において、エンゲルスは、すでに、しかも、マルクスと係わりなく、マルクス主義が成り立つのに必要な三つの思想的な源泉を、アウフ・ヘーベンしていた、したがって、マルクス主義者になっていた、とも言って差しつかえはないことになりました。エンゲルスは、この独自の論文を、マルクスたちがパリで発刊していた『独仏年誌』に寄稿しているのですが、そのときのエンゲルスは、ようやく二十四才にたっただけかりであったということとは、皆さんとしても、おおいに反省されることでないかと存じます。

ところで、マルクスの方は、四四年二月に、亡命地のパリ

資本論における方法と世界観（中、その二）（梯）

で、友人ルーゲとの共同編集で『独仏年誌』を、発刊することになっております。この『年誌』への寄稿者のなかには、マルクスと親交のあった詩人のハインリヒ・ハイネとか、さきほど申しましたところですが、エンゲルスに社会主義の思想を初めて教えたことになっているモーゼス・ヘスなどの名前も見られるのですが、マルクス主義の成立という点から見て、とくに重要な文献とされているものが、三つあります。それは、この『年誌』に掲載するためにマルクスがその前年の四三年に書いておいた「ユダヤ人問題に寄せて」という題名と「ヘーゲル法哲学批判序説」という題名との二つの論文、それから、エンゲルスがマンチェスターから寄稿した画期的な論文としての、この「国民経済学批判大綱」であります。ただし、エンゲルスとしては、翌年の四五年の単行本として出版することになっている『イギリスにおける労働者階級の状態』という著作のための準備を、すでに四四年中には、十分に成就していたはずのものと、ぼくたちは、ここで推察しておくことが必要なことと存じます。

そこで、まず、マルクスの「ユダヤ人問題によせて」という論文についてであります。この論文では、ヨーロッパに

二四三（五九九）

おけるユダヤ人による単なる政治的な解放運動を展開するだけでは不十分であつて、その運動の根底には、ユダヤ人をヨーロッパ人と同一の人間として見るという、普遍的な人間解放の思想が、原理として自覚されねばならないという趣旨の主張が、述べられてゐるのであります。もう一つ注意しておくべきことは、この論文で、フランス革命を分析的に批判している、ということでありませう。この革命は、封建的な社会からブルジョワ的な利己の人間を解放して、このブルジョワジーに資本制的な私的所有と営利的企業の自由とを保証したにとどまつて、けつして、封建制的な、あるいは資本制的な私有財産制度から、人間そのものを、人間一般を、解放したることになつてゐない、というように述べてゐるのであります。要するに、ブルジョワ民主主義的の革命は、たんに政治的の革命だけのものでは不十分であつて、その根底に、普遍的な人間の解放という社会革命の思想が貫ぬいておらねばならぬと主張してゐるのであります。そして、この同じヒューマニストとしての原理的思想が、ドイツの無産階級、すなわちプロレタリアートについて、より徹底した形で展開されたものが、続いて執筆された「ヘーゲル法哲学批判序説」となるわ

けであります。ドイツのブルジョワ民主主義的の革命への傾斜のなかにあつて、その変革の主体であるはずの産業資本の階級に属する人たちは、部分的には、いかに急進的に動いてゐるとしても、いずれは、絶対主義的な国家権力と妥協するようになるのであるから、急進的なりベラリストを自認するインテリゲンチヤは、プロレタリアートの立場に向つて出来るだけ早やく接近してゆかねばならない。この無産者としての賃労働者の階級なるものは、先進国のフランス、とくにイギリスにおいて、資本主義の発展そのものが生みだしてゆくものであることが、いわばブルジョワ階級に属する人びとが、無自覚的に作りだしてきたものであるということが、明瞭な事実になつてゐる以上は、ドイツにおける無産階級に属する人びとが、いまだ、その労働者階級としての組織的な運動において未熟であるとしても、ブルジョワジーと同じ人間でありながら、平凡な普通の人間としての生活でさえもが全く保証されてゐない、という目前の事実注目して、その原因が、どこにあるのかということ、理解しなければならぬ。こゝういつた経済的事実の認識から出発したところの、人間主義的な立場を、「ユダヤ人問題について」のばあいと同じく、

マルクスは、この論文で、まえよりも、いつそう一般化した視野で説明して、そして、われわれドイツの急進的な青年リベラリストの取るべき行動が、いかにあるべきかの実践のための原理と方向とを、明確に打ち出してゆくのであります。

すなわち、——「ドイツにおける無自覚的なプロレタリアートのこの人間性の完全な喪失は、いままでの封建的な私有財産制度によって生みだされただけのものでなく、これから発生してゆこうとする資本主義的な私有財産制度によっても、続いて生み出されてゆくかぎりのものであるとすれば、ドイツのプロレタリアートは、その喪失している人間的生活を、自らの手で回復するほかに方法はないはずである」——というように。このように主張するマルクスにとっては、ドイツにおけるブルジョワ民主主義的革命は、普遍的な人間の解放という使命を、自らの窮極の任務として担うことのできる唯一の階級たるプロレタリア階級によってのみ、成就されなければならぬし、そして、また成就されることが必ず出来るであろう、ということを主張していることになるわけであります。

このようなマルクスの主張を、さらに要約して言いかえま

### 資本論における方法と世界観（中、その二）（梯）

すと、後進国であるドイツのブルジョア民主主義的革命は、その進展の過程のなかで、逆に先進的な社会主義的革命をも同時に遂行しないわけにはゆかないというような状況に追い詰められていたことを、マルクスは時局的に直観していたということになりました。このような鋭い歴史的感觉を持つまでになったかぎりでは、マルクスは、ヘーゲル左派の急進的リベリズムの立場から離れてゆかざるを得なくなり、また、その徹底したフォイエルバッハの反神学的な人類についての思想にたいしてさえも、もはや満足できかねる心境になっていはずであります。そして、そのような心境に立つてこそ、はじめて、従来の「哲学は、プロレタリアートのうちに、その物質的な武器を見いだすように努めねばならない」というような言葉を打ち出すことができたのだ、というように解釈を、ぼくたちは、しなければならぬと思います。いうまでもなく、この有名な言葉は、逆に、マルクス自身も言っているように、ドイツの「プロレタリアートは、哲学のうちに、その精神上的の武器を見いだす」のでなければならぬという警告的な主張をも、同時に意味せしめているわけであります。いいかえますと、徹底した人間主義としての社会革命を、や

りとける主体が誰であるかということ、すなわち、さきの「ユダヤ人問題について」のばあいでは、いまだ不明瞭であった点を、このように、より明確に解明したことになるのであります。そうした立場でもって、この「ヘーゲル法哲学批判序説」のなかで続けて、マルクスは、本来的な「人間へのドイツ人の解放」のためには、この「解放の頭脳は哲学で、その心臓はプロレタリアートだ」と述べてゆくわけですが、このばあいに、パリに在住中であるマルクスの念頭には、フランスにおける前世紀末のブルジョア民主主義的な革命の後の反動的な動向、これにたいしてのリアクションが抬頭しつつある政治状況が、浮んでいたはずであります。すなわち、四四年の二月革命への物質的な衝動が、やがてドイツにも波及するであろうことを予測するという緊迫感を、身近かに受けとめていたわけでありませう。それと同時に、神学的に疎外されている人類を、その本来の姿にとりもどすために、ただ単に心理学と生理学とによって、要するに自然科学的な方法によって、基礎づけをするだけに、とどまっていたところのフォイエルバッハの唯物論から、マルクスが離反してゆくためには、そこに新らしく打ち立ててゆかねばならないと考へ

るにいたった、その「哲学は、プロレタリアートを止揚せずには実現しない」ということになるわけでありませう。このように主張したかぎりでは、しかし同時に、このプロレタリアートなるものが、近代社会の発展の過程で、どのようにして発生することになったのか、という経済学の問題を解明せねばならないという課題にも、マルクスは、当面せざるをえない、ということになってきたわけでありませう。

研究テーマについての、このような重点の置きどころの転換をよぎなくされた径違について、マルクス自身も、後年になって（『『経済学批判』の「緒言」のなかで）述べていることについては、皆さんも、ご承知のところであらうと存じます。それは、——いろいろの法律的関係や、さまざまな国家的形態なるものは、それらの専門領域の研究だけでは理解されるものではないし、また、人間精神の歴史的發展という文化の領域の研究からも、なおさら理解されるものでもないのだから、これらの上層的な研究領域の根底にあるところの、経済生活における人間関係だけから、マルクス自身の言葉とおりには、言いかえると、ただ「市民社会の物質的な生活諸関係」だけから理解される、——ということなのであります。青

年マルクスは四三年の「ヘーゲル法哲学批判序説」を執筆した直後において、このことに、ようやく、はじめて気づかされたということになっているわけでありませう。そして、この「市民社会の解剖は、これを経済学のうちを求めるべきである」と考えるべきでないかというようにも、同時に感じることが出来た、ということになったわけでありませう。ヘーゲルの「精神哲学」の領域内で具体化された一つの社会哲学としての『法の哲学』の批判をつうじて、ドイツ国家の法律制度なり政治問題なりを、原理的に説明してやろうと志したところの「ヘーゲル法哲学批判序説」なる論文の執筆の過程で、マルクスは、その最初の意図の誤りであったことが解つて、このような自己批判の結論として、法律制度や政治問題についての原理的解明なるものは、哲学のうちを求めるのは誤りであつて、経済学のうちこそ求めるべきであるということについて、若きマルクスは痛感させられた、というわけです。このようにして、その後の研究上の視野は拡大され、その主要テーマを経済学の領域に移行させざるをえない、という心境の変化が起つたのであります。

ちやうど、そのような時に、エンゲルスの「国民経済学批

資本論における方法と世界観（中、その二）（梯）

判大綱」という論文が、『独仏年誌』に寄稿されてきていたのであります。この論文が、いま言ったような心境の変化しつゝあつたマルクスに、非常に大きな刺激と感銘をあたえることになるということとは、ぼくたちとしても十分に推察できることであります。事実としても、マルクスは、エンゲルスのこの論文を読んで、経済学への関心を、いよいよ強めただけでなく、どういう視角から、当時の経済学界で読まれていた代表的な諸文献を批判的に読んでゆくべきか、ということについて共感をもつとともに、より具体的な経済学的知識について教えられたわけでありませう。いいかえますと、資本主義の発展が国民大衆の窮乏化を促進しているという事実についての認識は、マルクスも「ヘーゲル法哲学批判序説」のなかで述べているとおり、エンゲルスのこの論文を読む以前から持っていたわけなのですが、この認識における経済学プロバの知識は、エンゲルスの方がマルクスよりも具体的であつたし、そういう点で、多くの示唆をマルクスは受けた、ということになつていたのであります。とにかく、エンゲルスのこの論文に刺激されて、マルクスは、自分自身の経済学的知識の少ないことを痛感して、このときから、それまでの研究

の意慾を、さらに経済学の方向にも向けることになった、ということに、ぼくたちは注目しておかねばならないと存じます。

このように、今後の研究活動の焦点を哲学の領域から経済学の領域に移行させねばならない、という心境の変化が、いよいよ顕著になっていったその当時の、マルクスの精神的に読破していった文献の主なもの、スマイスの『諸国民の富』、リカルドの『経済学と課税の原理』、ジェームス・ミルの『経済学綱要』、セーの『経済学概論』など、ということになっております。これだけの文献を、一ヶ年少々の期間に、ノートしながら読んでいったということだけでも、マルクスの当時における経済学研究への没頭のほどが、異常なものであったことが解ると思うのですが、当時のこの「抜粋ノート」が、現在まで残されているものとして九冊にもなっていたのであります。そして、このようなイギリス、フランスの古典派の経済学の重要な文献を、精力的に読破していった、その努力の成果として実ったものが、四四年の四月から八月にかけて執筆したとされている一連の手稿の全体なのであります。

この一連の手稿が、全体として統一されたものとして公開

されたのは、やっと今世紀になってのことであって、マルクスの生前には、ついに発表されていなかったのであります。

現在、ぼくたちが『経済学および哲学に関する手稿』という幾つかの訳本を手に入れることになっておりますが、それは、一九三二年に、アドラツキーが、モスクワのマルクス・エンゲルス研究所から依頼を受けて、編集したところの『マルクス・エンゲルス全集』（Marx Engels Gesamtausgabe）のなかで、この一連の手稿の全体が、そのまま「経済学および哲学に関する手稿」（『Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844』）という見出しで、収録されていたことによるのであります。そして、それ以来、現在では、日本では、この見出しの標題が、そのまま、一冊の本の書名となって、翻訳されており、略して一般に「経済学・哲学手稿」とか「経・哲手稿」とか、というように呼び慣わされているわけでありますが、このことについては、皆さんもよくご承知のところであると存じます。しかし、前世紀の四四年のマルクス自身としては、このように遺稿のままで今世紀の三〇年代まで残されたところの、この一連の手稿の全体は、自分の最初の一冊の本にして、その本の標題を「経済学および政治学

批判」と名づけたものにしようと考えていたのであったのですが、この処女出版となるべきマルクスの計画は流産することになりました。そして、この一連の手稿の全体は、そのまま遺稿として殆ど一世紀に近い間を、まったく埋れてしまつて、マルクス学界でも問題にされていなかったのであります。したがつて、レーニンも、この一連の手稿を、ついに生前に読むことが出来なかつたわけであります。

もしも、レーニンが、生前に、この『経・哲手稿』の内容となつてゐる、その一連の手稿を入手してたとしたら、この手稿の全体を熟読したであらうし、そこに展開されているマルクスのヘーゲル哲学批判を、そのまま受けいれることによつて、あるいは、自分自身でヘーゲル哲学を研究するといふことを、せずに済ませて、そして、あるいは、わざわざ『哲学ノート』を書かなくても、よかつたのではないかと、いふふうを考えられることも出来るのであります。しかし、これは、たんなる臆測にすぎないことで、同じヘーゲル哲学批判にしても、マルクスとレーニンとのあいだには、それぞれ特色をもつたものとして、ぼくたちに役立っている、といふことは事実であります。歴史的な事実の解決にたいして、

資本論における方法と世界観（中、その二）（梯）

こうした仮定的な臆測をして見ても、ほとんど意味はないのであり、たんなる思惟のうえでの遊技にすぎないものでしかないでしょう。それにしても、もう一つ、ここで、仮定的な臆測を、やつて見たいような気持ちに、ぼくは誘われるのです。——というのは、もしも、マルクスが四四年の八月の末頃に、その意図していた「経済学および政治学の批判」という題名の一冊の本が、その計画どおりに実現していたとしたらば、当時の思想界にたいして、マルクスとしては、もっと大きな影響を与えたのでないか、という仮定なのですが、——ここで推定されるところの、より大きな影響力ということは、かならずしも臆測にすぎないものではない、というように、ぼくは思うわけなんです。すくなくとも当時、マンチエスターに居たエンゲルスにたいしては、非常に強い感銘を与えたはずだ、といふことは十分に考えられることとせねばなりません。不幸にして、あるいは不運にも、この『経・哲手稿』の内容になつてゐる当時の一連の手稿の全体は、一冊の本としても、一つの論文としても、当時に発表されなかつたにしても、しかし、マルクスの頭のなかには、この一連の手稿の全体に盛りこまれている思想は、たしかに存在してい

たわけであります。そのかぎりでは、この頭の中に構想されていた思想内容は、当時書いたマルクスの他の何かの論文には、たとえ部分的なものとしてでも、表現されているはずである、というように推定することは、許さるべきことであつて、そのかぎりでは、このような推定は、たんなる臆測ではないわけでありませう。そういう意味で、一八四四年の期間のマルクスの他の論文を点検してみると、ということ、ぜひとも、やっておかねばならないことになります。

〔断り書き〕

以上の本号に掲載したところの第七節の部分は、一昨年の二月末に、わたしの行った最終講義においては、実際に話しをしたものではない。テープレコーダーから文章化されたところの、その原稿なるものは、或る程度の添削をしないかぎりでは、当日、わたしの最終講義を聞いてもらった学生諸君や同僚の諸氏にたいしてだけでなく、さらに広く一般の読者にたいしても、どうかこうか読むに価する程度のものには、到底、なりえない文章であつた。この点は、わたしの立命館大学に在職中に毎年ながら繰りかえしてきた普段の講義の、その内容なり、

その話し方にも、一つの責任がある、というように反省させられているわけである。それにしても、いったん、このような形で、雑誌に公表してしまうと、今後とも、この公表した論述が、この時期までの、わたしの研究水準を示している証左として、一般に受けとられることにならざるを得ない。そういう点も、右の添削の仕事に取りかかるさいに、わたしとしては、配慮せざるをえなかつたので、本巻の第一号に公表した文章では、或る程度の添削にとどめる、ということに満足できない論述部分には、大巾な補足を行うことにしておいた。このような大巾な補足文を追加した添削という仕方は、前号において公表した部分、すなわち第六節の部分についても、同様に施されてある。

そういうわけで、最終講義で実際に話した内容だけのものにたいして或る程度の添削を施すだけで済ますつもりであつたところのものは、——このような「研究ノート」として本誌に公表してゆくことになつた本稿は、——予想外に長文のものになることになつてしまつた。それだけでない。本号において公表する論述内容にいた

っては、最終講義のさいには、まったく触れなかった内容のもの、というよりは、正直に言ってしまうえば、わたし自身が現在までに十分に熟知してなかった内容のものでさえ、そこに含まれているのである。この点は、前号の論述のなかで一言だけ断り書きをしておいたところであるが、ここで再び、その理由と経緯とを申し述べて、一般の読者の諒恕と理解とを得ておきたいものと、わたしは思うのである。

というのは、わたしの最終講義の内容を、いま言ったような添削の仕方で公表するにあたって、ついでに、わたし自身の今までの知識の欠陥を埋めておこうという欲望が、わたしの心のうちに生じてきた、というわけである。前号掲載分としての第六節の論述のなかの断り書きでも、触れておいたところであるが、わたしは、初期マルクスの研究者ではないのである。ただ一つ、マルクスの初期の一文献としての『経・哲手稿』を、わたしなりに解釈した研究成果が、一冊の著書、すなわち『経済哲学原理』という本になっているだけにすぎない、というのが事実である。それにもかかわらず、学界の一

資本論における方法と世界観(中、その二)(梯)

部では、わたしが、あたかも初期マルクスの研究者でもあるかのように、誤って過大評価されてきていることも、また一つの事実である。

そこで、この過大評価を正当な評価たらしめるために、いつかの将来の時期に、初期マルクスの諸文献を系統的に研究しなければならぬ、という気持を、わたしに抱かせてきたことは、まったく、なかった、とは言いきれないが、それよりも先きに、研究の順序としては、はやく『資本論』における経済学的諸範疇の方法論的意味を、一つ一つ吟味してゆくという仕事を、さらに前進せしめておくべきである、という意図の方が、本心であったし、しかも、この本心を、現在においても変わらずに持ち続けているのである。しかし、このわたし自身の本心は、いつまでも、たんなる主観的意図だけのものにとどまっておかなか、その実現の運びのための外的および内的な諸条件を整えることが出来ないまで、現在にまで及んでいないというのが、実状なのである。そして、このわたしの本命とする仕事を或る程度に進歩せしめた後に、ばあいによっては、その進捗の過程においても、初期マルク

二五一 (六〇七)

スに遡って研究するということが、わたし自身の研究意欲からの内的要請として、あるいは出てくることもあろう、とも思ってきたのが、わたし自身の現在までの心境なのである。

ところで、本稿を作製するための上述のような加筆をしてゆく過程で、あたかも、そのような内的要請が、わたしの心のなかに湧いてくることになってしまった。いかえれば、わたしとしては、このさい、どうしても、

初期マルクスだけでなく初期エンゲルスの諸労作を、ドイツのブルジョア民主主義的革命的革命のための理論的な役割を果たしたところの、ヘーゲル左派の哲学的展開の過程のなかに、位置づけておくことが必要である、と感ずることになったのである。それにしても、初期のマルクスおよびエンゲルスの諸労作の理論内容なり思想内容なりについて、わたしとしては、それらの明確な知識を持ち合せているわけでない。そこで、前号の第六節の図式を挿入した箇所あたりのところで断り書きをしておいたように、それまでに、たまたま一読したことのある一冊の本——杉原四郎氏の『マルクス経済学への道』という著書

——を思いだして、そこにおける青年期におけるマルクスおよびエンゲルスの理論活動ならびに実践活動を叙述してある部分を繰りかえし読んで、わたしは、おおいに教え導かれるということになった。そして、わたしとしては、改めて、青年期のマルクスおよびエンゲルスについての研究ということも、早急に、やっておかなければならない課題として受けとめることを、よぎなくされるということになってしまったのである。

というのは、いままでに、わたしとしては、四四年の『経・哲手稿』を、青年期のマルクスの諸労作から切り離して研究していたのにとどめて、それに満足しようと決めてかかっていたわけであるが、こうした研究態度では、この『経・哲手稿』そのものの全面的な理解にも、不十分なことになっているのでないか、ということを変更して反省させられることになったからなのである。いいかえれば、この『経・哲手稿』についての全面的理解のためには、このマルクスの労作の生れる前後の、かれの諸労作をも一つ一つ研究して、かれの思想形成の過程の一駒として、また、さらに、エンゲルスとの思想

的ないし実践的な交遊の過程の所産として、捕えなおす必要がある、というように痛感させられることになったわけである。

それにしても、本稿の作製にあたって、このように痛感した問題を、当面のわたし自身の課題として、早速、その研究に従事するということは、時間的にも精神的にも、とうてい不可能なことであった。そういうわけで、右の杉原氏の著述に示されている同氏の研究成果を借用して、執筆していったものが、本誌の前号および本号に掲載してあるところの、本誌の第六、第七の各節の論述内容となっている。さらに、本号に併せて掲載すべく、すでに執筆済みの第八節および第九節の両節についての論述も、また同様のものとして出来あがっている。

これらの両節は、締め切り間きわで、読み直すだけの時間的余裕も、なくなってしまうので、本誌の次巻の何号かに掲載すべく、いまは、そのままに残しておくほかない、ということになってしまった。このように時間的に制約されたなかで、とりあえずの補足的な論述として、執筆してきたものとして、右に挙げた諸節における

資本論における方法と世界観（中、その二）（梯）

執筆内容は、いま言ったように杉原氏の研究成果のうえに乗って、そして、ところどころに、わたし自身の思いついた解釈を施しながら、書き綴っていった、という程度のものである。したがって、杉原氏の叙述の筋を、そのまま借り受けていることになっていてだけでなくて、同氏の叙述における言葉も、そのままに借り受けて、わたし自身の言葉なり思想なりとして、右に挙げた本稿の諸節の内容は、論述されていっていることになっているのである。

この点については、杉原氏に、ここで深くお詫びしておかなければならないことであるし、わたしとしても、うしろめたく思っているしだいである。それと同時に、とにかく、暫定的な文章としてでも、右の各節の執筆ができたということについて、同氏に謝意を表しておかねばならない。また他方では、この拙稿を読まれるであろう読者一般の方々におかれても、右の諸節の論述内容が、いま述べたような経緯で出来あがったものであることを、いいかえれば、取りあえずの暫定的な、わたし自身の「覚え書き」にすぎないものである、というように、寛

二五三（六〇九）

巻の編集および発行までのことが、記されてある。

容な気持ちで、理解して頂ければ——というように、ここでお願いに及ぶというしだいである。さらに、そのようにして補足的に執筆した内容を、あたかも、最終講義の当日に、そのなかで実際に話したかのように、文章を綴つてあるわけであるが、この点については、読者の方々は、十分に理解して頂けることと、わたしとしては、勝手に期待してはしだいである。要するに、杉原氏および読者一般による寛容な理解を懇望する、というだけのつもりで、以上の長い「断り書き」を、ここに附加せざるをえなかつたわけである。なお、右の諸節を執筆するばあいには、大いに役立った年譜は、大月書店刊行の『マルクス・エンゲルス全集』の第一巻の巻末に収録されてあるもの、および河出書房刊行の『世界の大思想』第二期の第四巻『マルクスの経済学・哲学論集』の同じく巻末に収録されてあるもの、の二つである。前者のものは、四四年までの期間であるが、マルクスとエンゲルスとのそれぞれの年譜が、詳しく記るされており、後者のものは、マルクスだけにかぎられているが、かれの出生の年から、一九一〇年のカウツキーによる『剰余価値学説史』第三